

## [資料] 宣教師 Henry B. Schwartz の 1896 年陸羽地震見聞記

秋田大学地域防災減災総合研究センター\* 水田 敏彦

鏡味 洋史†

Missionary Henry B. Schwartz's Memoirs of the 1896 Rikuu Earthquake

Toshihiko MIZUTA

Research Center for Regional Disaster Prevention and Mitigation, Akita University,  
Tegata Gakuen-machi 1-1, Akita, 010-8502 Japan

Hiroshi KAGAMI

Ishikari, 061-3214 Japan

The 1896 Rikuu earthquake, an inland earthquake that caused damage to the Iwate and Akita prefectures, was one of the biggest events after the 1891 Nobi earthquake and many field surveys were performed and reported. The authors conducted literature surveys on this earthquake through these reports, administrative documents, newspaper articles, local historical materials and personal documents such as travelogues. This paper focuses on the earthquake observations left by H.B. Schwartz, a foreign missionary, which was listed in the “Newly Acquired Japanese Earthquake Historical Materials” edited by the Earthquake Research Institute, the University of Tokyo. H.B. Schwartz's memoirs of the 1896 Rikuu Earthquake was found in a book titled “In Togo's Country” published in 1908 and the Japanese translation of the book was published in 1984. In this paper, the authors investigated these memoirs of travelling to the affected area, based on the both editions of original and Japanese. He had been appointed in 1894 as head of the Hirosaki Church and two years later he had a chance to visit disaster area of this earthquake. He started to the affected area just 10 days later and it took 3 days to Akita city with a rickshaw. During the way from Akita city to the affected area, he watched the scenery, comparing it to his native America. In the affected area he visited several villages and his report is meticulous and accurately characterizes the disaster. With his description, we can trace and learn the feature of disasters through foreigner's eye. The authors are going to look for such unknown documents written by foreigner expanding to other earthquakes.

Keywords: 1896 Rikuu Earthquake, Reconnaissance reports, Literature survey, Foreigner's memories

### § 1. はじめに

1896 年陸羽地震は陸中(岩手)羽後(秋田)に被害をもたらした内陸地震で、1891 年濃尾地震を契機に発足した震災予防調査会によって組織的な被害調査がなされている。筆者らは、これらの報告を始め当時の行政文書、新聞記事、地域史料などの収集、解読に努め、文献調査を進め[水田・鏡味(2008, 2009)]などに報告している。さらに、対象を個人の日誌などに広げ、歴史地震研究会では『畑屋村惨状記』

について報告している[鏡味・水田(2017)]。本論では、東京大学地震研究所編集の『新収日本地震史料続補遺』[東京大学地震研究所(1993)]に収録されている、外国人宣教師の H.B.Schwartz の残した地震見聞記に着目し、紐解いてみる。

### § 2. 新収日本地震史料

東京大学地震研究所編集の『新収日本地震史料』は、本編 5 巻、補遺、続補遺とそれぞれの別巻を含

\* 〒010-8502 秋田市手形学園町 1-1  
電子メール: tmizu@gipc.akita-u.ac.jp

† 〒061-3214 北海道石狩市在住  
電子メール: ve3iv6@bma.biglobe.ne.jp

め全 21 冊よりなり、1982～1994 年に刊行された。『続補遺(1993)』は 734～1926 年の地震を収録しており、1896 年陸羽地震については『薩摩国滞在記－宣教師の見た明治の日本』が 1 編のみ引用掲載されている。出典は「H.B.シュワルツ著、島津久大・長岡祥三訳、昭和 59(1984)年 11 月 20 日、新人物往来社」とあり、「地震の現場を訪ねる」が全文引用されている。

### § 3. 著書および著者の概要

#### 3.1 訳本および原本

『薩摩国滞在記 宣教師の見た明治の日本』は新人物往来社 1984 年発行で、180 頁よりなる。この本の原本の“IN TOGO’S COUNTRY”は京都大学図書館に所蔵のものを見つけ借用利用した。副題に“Some Studies in Satsuma and Other Little Known Parts of Japan”とある。著者は Henry B. Schwartz. M.A. (M.A. : 文系修士号)と書かれ出版社は Cincinnati: Jennings and Graham, New York: Eaton and Mains, Copyright 1908 とある。図 1 に原本の扉頁を示す。

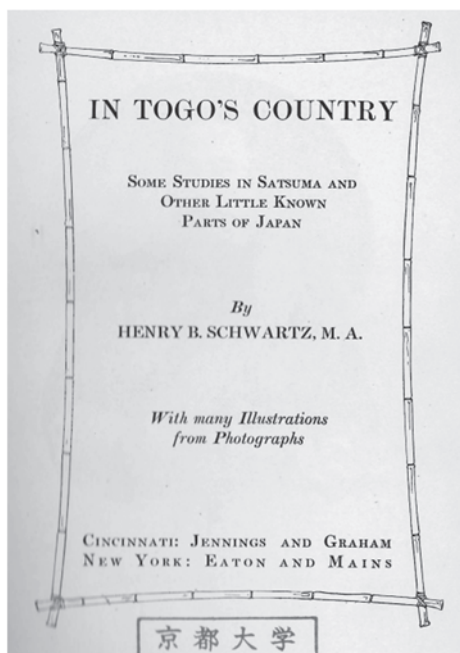


図 1 原本 “In Togo’s Country”の扉頁  
Fig. 1. Cover page of “In Togo’s Country”.

両書の目次を比較して表 1 に示す。訳本では最初に掲載写真をまとめている。最初の写真は原本にはなく、日本滞在中のシュワルツ一家を写したものである。巻末の「訳者あとがき」に記載があるので後述する。

原本では写真は文中に掲載され、巻頭の目次に続き写真のリストが掲げられている。

目次の前に、訳本では「原著について」の前書きがジョン・B・ストックカー(鹿児島大学前講師)の名で記されている。後述するが、著者の Henry B. Schwartz は日本滞在の後半に鹿児島に滞在し本書を記している。ストックカー氏は、「百年前鹿児島に居住していた一外国人」が「いかなる意見を“日本について”持ち合わせていたか、知りたいと思っていた」とし、本書を紹介している。本書の書かれた当時は、日露戦争の終結後で日本そして薩摩、東郷(平八郎)が世界中の関心の的となっていたとしている。

「はじめに(Preface)」は 1907 年 5 月 6 日に鹿児島で書かれている。「1893 年(明治 26 年)以来、日本に住むという恩恵に浴している。来日以来、この 14 年間の大半にわたり、私は外人旅行者が一度も訪れたことのない土地を見物し、海外からの観光客が一度も足を踏み入れたことのない通りを歩くという幸運に恵まれてきた。私が、この国のほとんど知られていない地方についても知識を有し、特に「薩摩国」に対して興味を抱いていることは、日本についての書籍目録に、ここに新たな一冊を付け加える資格のある者としてとして認めてもらえるだろう」と述べ、各章を構成する内容は、日本滞在中のそれぞれ異なった時期に書かれたものである、としている。

原本の巻末には索引と日本語の簡単な用語集が掲載されており、日常会話の他、調度品や食品関係が多く、興味深い。訳本の巻末に「訳者あとがき」が記されており、著者の経歴が記されている。経歴については後述する。

#### 3.2 著者の略歴

著者の Henry B. Schwartz については、訳本の「訳者のあとがき」に書かれている。アメリカ・オハイオ州出身の米国メソジスト監督教会宣教師である。ウェスレアン(Wesleyan)大学卒業後ボストン(Boston)大学で神学を修めている。来日後の経歴を表 2 に示す。

本文中には、家族については一言も触れていないが、「訳者あとがき」には家族の事が書かれている。「1905 年発行の英文誌『Tidings from Japan』に掲載された一家の写真によれば、夫と 15, 6 歳の令嬢と、それより少し年下の男の子と、8, 9 歳と思われる着物姿の少女の一家 5 人が日本庭園をバックに写っている」としている。訳本の写真頁の冒頭の写真がこれにあたる。

表 1 訳本と原本の目次の比較

Table 1. Comparison of contents between translated and original editions

	訳本	原本
表題	薩摩国滞在記	In Togo's Country
副題	宣教師の見た明治の日本	Some Studies in Satsuma and Other Little Known Parts of Japan
出版社	新人物往来社	Cincinnati: Jennings and Graham, New York: Eaton and Mains
発行年	1984	1908
口絵写真	シュワルツ一家 写真 26 枚(原本より)	—
まえがき	原著について ジョン・B・ストッカー	—
献辞	—	To Three Friends
目次	目次	Contents
		List of Illustrations
まえがき	はじめに ヘンリー・B・シュワルツ	Preface, Henry B. Schwartz
第 1 章	東郷の故郷にて	In Togo's Country
第 2 章	日本の聖地・善光寺への巡礼の旅	A Pilgrimage to Zenkoji
第 3 章	日本の宿屋にて	In a Japanese Inn
第 4 章	鳥の足跡の文字	Writing With Bird Tracks
第 5 章	地震の現場を訪ねる	A Visit to the Scene of an Earthquake
第 6 章	琉球—忘れられた王国	Loo Choo - A Forgotten Kingdom
第 7 章	日本の雪国を徒歩旅行する	A Tramp Through Snow-clad Japan
第 8 章	最初の日本領事	The First Consulate in Japan
第 9 章	長崎—宝石の岸辺の町	Nagasaki - The City by the Jeweled Shore
第 10 章	日露戦争後の日本	After the War
索引	—	Alphabetical Index of Contents
用語集	—	Glossary of Japanese Terms
あとがき	訳者あとがき	—

表 2 H.B. Schwartz の来日中の経歴

Table 2. List of H.B. Schwartz's Career in Japan

年	教会関係	教鞭をとった学校
1893	来日, 銀座教会牧師	福音会
1894	青森教区(弘前)長老司	東奥義塾
1896	陸羽地震	
1897	帰任, 一時帰国	
1900	長崎教区	鎮西学院
1901		同院長
1902	南九州教区(鹿児島)	
1907	本書執筆	
1915	帰国	

### 3.3 本文の構成

本文は表 1 の目次に示すように 10 章からなり, それぞれ独立した内容になっている. 本書がまとめられたのは鹿児島に滞在中の 1907 年である. 内容は著者がそれまでに体験したことをもとにしており, 取り上げた場所も異なり, 時期もそれぞれ異なる. 掲載の順は, 必ずしも時代の順にはなっていない. 第 5 章「地震の現場を訪ねる (A Visit to the Scene of an Earthquake)」が 1896 年陸羽地震の探訪記であり, 弘前教会に赴任中に弘前から被災地に出向いている. 本論では, この章のみを対象に紐解いてみる.

## § 4. 当時の弘前と交通状況

弘前は弘前藩の城下町として発展した町で, 1888 年 2 月の市制の施行で発足した全国 36 都市の一つであり, 陸軍第八師団, 旧制弘前高校が設置され津軽地方の中心として発展していた. 本章では著者の所属した弘前教会と当時の交通状況を述べておく. [括弧]内は筆者の補足を示す.

### 4.1 日本基督教団弘前教会

著者が赴任していた弘前教会(現日本基督教団弘前教会)は同教会のホームページによると, 「1874 年(明治 7[原文ママ]), 津軽藩の藩校であった東奥義塾[『青森県史通史編 3』[青森県(2018)]では, 津軽藩の藩校ではなく「学制改革藩校の系統を受け継ぐ学校」として「開校にこぎつけた」と記載]が再興された際, 元津軽藩士でキリスト教徒であった本多庸一初代塾長が, 北米のメソジスト教会より日本に派遣されていた J・イング宣教師を英語教師として招聘した. イング宣教師に感化を受けた東奥義塾の生徒 22 名が洗礼を受けてキリスト教徒となった. 彼を中心として 1875 年(明治 8 年)10 月 3 日, 東北最古のプロテスタント教会として弘前公会(現弘前教会)が誕生した」としている. 著者の Henry B. Schwartz は 1894 年に着任し, 1897 年まで滞在した. その間 1896 年陸羽地

震に遭遇し、現地に出掛け滞在記を残している。また、第 7 章「日本の雪国を徒歩旅行する (A Tramp Through Snow-clad Japan)」では弘前から秋田への雪中の徒歩旅行記が記されている。

#### 4.2 当時の交通状況

上野から青森まで私鉄の日本鉄道が 1891 年に全通し、官設奥羽北線が 1895 年に青森から弘前を越え大鰐まで延伸していた。秋田県の被災地へは弘前から南下するか、東北本線の黒沢尻・盛岡から奥羽山脈を越えなければならなかった。鉄道の通じていない都市間の交通は人力車が利用されていた。

#### § 5. 「地震の現場を訪ねる (A Visit to the Scene of an Earthquake)」の概要

本章では、文章を区切って概要を述べる。以下の節の表題は原本・訳本にはなく、筆者が内容に応じ適宜つけたものである。なお、本資料の日本語訳は原則訳書のものを用いるが、原本と大きく異なる箇所はカッコ内に(訳語と原英文)を付記した。また、引用にあたって和暦は西暦に、漢数字はアラビア数字に改めた。

#### 5.1 書き出し

「地震は日本の特産物といってよいほどほとんど毎日のようにこの国のどこかで起きている」との書き出しで始まっている。1890～1896〔原本では 1895〕年の 5 年間(正確には 6, 7 年間になる)に、地震 3 回、火山爆発 1 回、津波 1 回を挙げている。地震 3 回は 1891 年濃尾・1894 年庄内・1896 年陸羽、津波 1 回は 1896 年三陸津波がすぐに思い上がる。火山爆発 1 回は 1888 年磐梯山の誤記かと思われたが、この期間には 1893 年 6 月の福島県吾妻山の噴火があり、震災予防調査会報告に〔大森(1893)〕の報告がある。この噴火では調査中の地質調査所の職員 2 名が殉職している〔三浦(1893)〕。

次に「1896〔原本では 1895〕年の 8 月 31 日に起きた地震は、その中でも一番の大地震であったが、起きた場所に人家が多くなかったことと、起きた時間が良かったために人命の損害はそれほど大きくはなく、死者 250 人以下、負傷者 500 人ないし 600 人であった。1 万戸の家が完全に倒壊し、その 2 倍も家が一部壊れた」と陸羽地震の特徴を述べている。死傷者数は被害統計とほぼ一致しているが、倒壊数は全半潰の合計でも 1 万に達しておらず過大である。

#### 5.2 弘前から秋田まで

次のパラグラフから、訪問記が始まる。地震から 10 日後に弘前を出発した。秋田まで、雨の中の 3 日間の旅、交通手段は記されていないが日数から人力車での移動であろう。途中、秋田県に入ると道路が良くなり、秋田市の様子も清潔で繁栄しているように見えたと記している。秋田の旅館は士族の経営する宿で、宿屋の主人は手料理のピフテキや焼き魚を夕食に出している。主人が廊下に座って「こんな粗末なお食事しか差し上げられないで大変失礼しております」という丁寧なものであったと記している。

主人の息子が地震の現場から帰ったばかりであり、夕食後にいろいろな情報を得、現地の旅館の主人などに宛てた紹介状をもらっている。さらに、人力車の手配してもらっている。人力車は 1 マイル幾らと定められた金額の回数券を駅通で渡すのが通例であるが、地震が起きてからは道路が壊れたことを口実に 2 倍の金額を要求されることがあるので、駅ごとに支払うべき金額を書き入れた旅程表を作ってもらっている。人力車の車夫は時々変わり、平均して 1 時間で 4 マイル(6.4 km)走るとしている。図 2 に弘前から被災地への行程を二重線で示す。背景地図は 1890 年(明治 23 年)発行の 20 万分の 1 地勢図を用いた。



図 2 弘前から秋田市を経て被災地への行程

Fig.2. Supposed route from Hirosaki to the affected area via Akita city.

### 5.3. 秋田から境まで

翌朝 7 時に宿を出発している。「私の車夫は愛想のよい人間で、ガイドの役も同時に務めてくれた」とある。「道は川に沿った美しい谷間を上がっていた。川の両側の傾斜した丘一面に黄金色の田が作られていた。米を植えた小さな不規則な形の区画が何段にも重なって谷全体を覆って、その一つ一つが見事な技術で配置され、米の生育に欠くことのできない水が次から次へと完全に配分されて流れていた」とし、棚田を観察している。「人家はまばらで、遠い丘の麓のあたりに建っていた。時々、道は昔の国道と一緒にになり、何マイルもの間、百年もたったかと思われる古い松並木の街道を通ることがあった」と記し、故郷のニューイングランドの松の木の光景を回想している。「村の人々は全員が藍の栽培に従事しており、道端のいたる所に、その葉が干してあった」とし、アニリン染料の発明で藍産業は打撃を受けていたが、「現在もおこの地方の生産物の一つである」と観察している。

「四つ目の村を過ぎた頃から、先日の地震の残した跡が方々に目立つようになった」とある。4つの村は牛島町、仁井田村、豊(戸)島村、和田村を指していると思われる。「道は今まで人家がなかったような丘の上へと続いていたので、倒壊した家は見当たらなかつ

た。しかし、道路には大きな裂け目が何本も走り、土手は崩れ落ち、橋は壊され、地滑りは無数にあった」と被災地に近づいたことを記している。

### 5.4. 境の宿で昼食

「午前 11 時頃に境という村のきれいな宿に到着した」とある[『新収日本地震史料続補遺(1993)』では「午前一時頃」(数字の脱字)と記載、その他にも転記の誤りがあるので注に示す]。境は羽州街道の宿場で宿屋があり、そこで昼食をとっている。山鱒の焼物と鶏の貝殻焼きと御飯で、炭を入れた小火鉢と器として使われる帆立貝に感心している。これは現在でも青森・秋田地方の名物である。昼食が済んで人力車で静寂な中を夢見心地で進み、「長い木の橋を渡り、大曲の町へ入ったので、私の夢もそこで終わった」としている。境から大曲までおよそ 25km あるが、転寝をしていたためか、その間の風景の記述はない。この長い木の橋は玉川橋のことで、1880 年に仮橋、1889 年に木橋が架けられ、長さは 425m あり当時の日本最長の橋であった[秋建時報(2006)]。図 3 に秋田から境に至る行程を示す。背景地図は 1890 年(明治 23 年)発行の 20 万分の 1 地勢図を用いた。

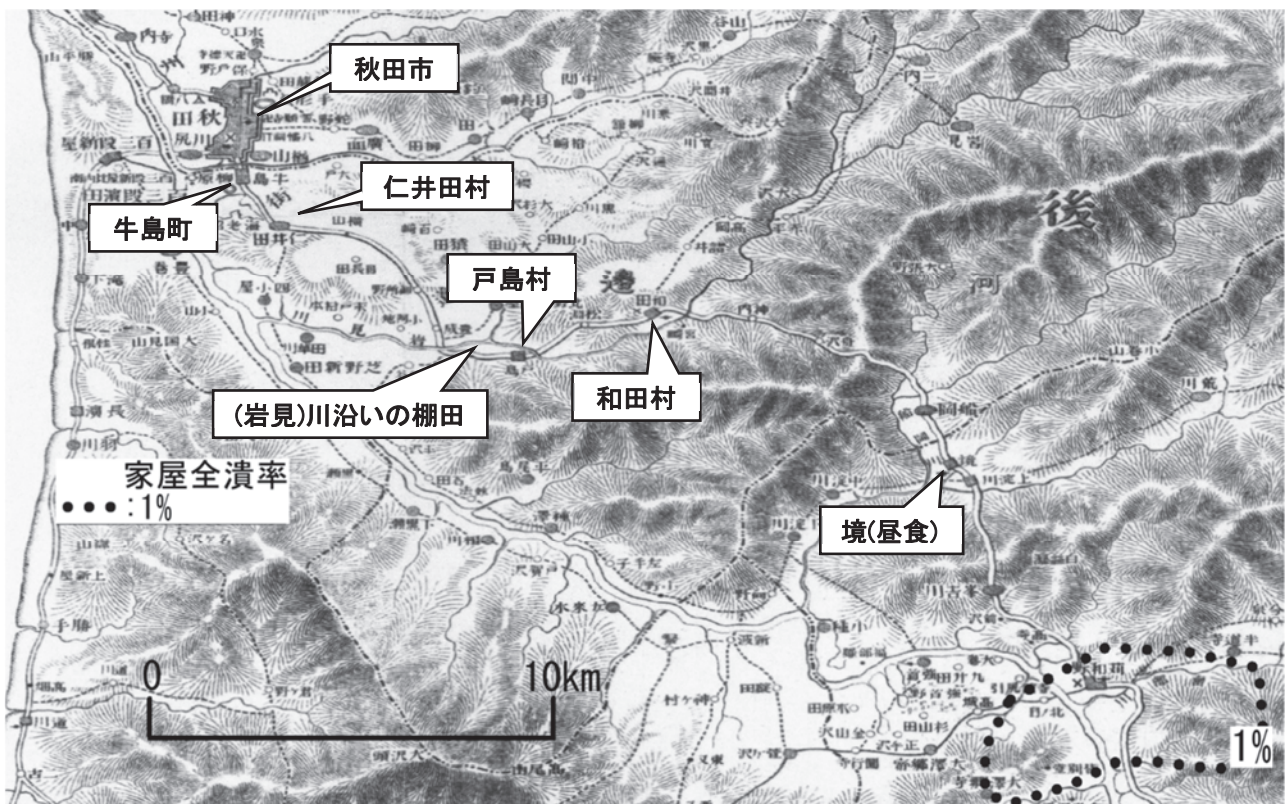


図 3 秋田から境に至る行程  
Fig.3. Trail from Akita to Sakai.

## 5.5 大曲に到着

大曲の町では「全体の 15 パーセントの家が何らかの損害を被り、8 人が死んで、11 人が負傷した」としている。大曲町の被害統計は死者 8、負傷者 11、全潰率 10%[水田・鏡味(2009)]であり正確に把握している。「大きな材木で倒れないように支えをした宿屋で一夜を過ごした」とあり、翌日、近くの村を見て回っている。「ほとんどの家が完全に倒壊していたが、残っている家は突っかい棒を支えにして辛じて立っていた。村人たちは板張りに、莫塵を敷いた粗末な小屋に住んでおり、最も年取った婦人から小さい子供に至るまで、壊れた家の間を何か助かったものはないかと探していた。幸い、病気の発生はほとんどなかったようだが、地震の後、10 日間も強い雨が降ったために、すべてがかなり悲惨な状況にあった」と状況をよく伝えている。

## 5.6 被災地を巡る

「この地方の一番大きい町は六郷で、1100 戸の家があり、人口 6558 人であった。学校の大きな建物の中に病院ができていて、赤十字の医者と看護婦が怪我人の手当てをしていた。地震が起きたのが午後 5 時で、働き手の男女は、離れた田圃で働いていたので、残っていて怪我をしたのは大抵、年寄りか子供であった。そのため、比較的死傷者が少なかったのである。家を守り、まだ働けない小さい子供たちの面倒を見るために残っていた老婆や子供を除いて、家の中はほとんど空になっていて、家が倒れたときは、その子守りの人々も大抵は家の外にいたのである」としている。六郷町の戸数、人口、仮設の診療所設営、地震の発生時刻と人的被害の関係など適切に理解している。

次に、「千屋の村では激しい上下動の揺れがあって、まるで村の真下で爆発が起こったかのようなありさまを呈していた。そこでは倉庫の床の真ん中が約 2 フィートほど持ち上がって壊れ、入り口の重い石の敷居が、まるで菓子を切ったように 1 インチの厚みで何箇所にも割れていた。家の下には少なくとも 6 インチの幅で大きな亀裂が走っていた」としている。千屋村では千屋断層が出現し、被害統計は死者 34、負傷者 38、全潰 385、全潰率 59%[水田・鏡味(2009)]であり、被害の激しかった地域である。

「約 5 マイル離れた隣の村は、私の見た限りでは、一番被害がひどかった。橋という橋は全部壊れ、1 マイルもの間、路面が沈下して、その上を 1 フィートの深

さで水が流れていた。そこを渡った車夫の話では、水の底はきれいな砂(細砂: fine sand)だったということである」と記している。距離および被害程度より畑屋村と推測する。同村の被害は死者 20 全潰 329 全潰率 76%と最も被害の大きな村である[水田・鏡味(2009)]。

最後に高梨村を訪れている。「秋田県第一の金持ちである池田家の屋敷があった」とし、「事務所や納屋、その他の建物を含めると、まるで小さい村のようだった。池田氏と、その家族は仮小屋に住んでいたが、大勢の男たちが半分壊れた家を解体して残骸を整理する作業をしていた。彼[12 代池田甚之助ではないかと思われる]の話では家を襲った地震は完全に上下動(もっぱら水平動: entirely horizontal)でひどく揺れたので、庭を走り抜けようとして途中で何度も転ぶ始末であったとのことである」と大邸宅の様子を伝えている。文化庁の『文化遺産オンライン』[文化庁(2022)]によると現存する庭園を「造営した第 13 代当主の文太郎は、学校、保健衛生施設及び農村共同施設等の建設をはじめ、私財を投じて数多くの事業を展開し高梨村の発展に大きく貢献した。庭園は、明治 29 年(1896)の震災により家屋が倒壊したのを機会に、耕地整理事業と合わせて所有地を集約・整理して屋敷地を拡張するとともに、東北地方をはじめ日本各地において公園及び個人住宅の造園を手がけた近代造園の祖、長岡安平の助力を得て明治時代末頃までに基本的な地割が造営され、大正年間におおむね完成したものである」としている。現在一般に公開されており市民の憩いの場となっている。

池田氏との談話で「私がアメリカ人だとわかって、差し迫った大統領選挙についての情報を知りたい、それが日本の経済にどう影響するか、私の意見を求めた」とある。

高梨から 2 マイルほどで大曲の町に戻っている。そこで、訪問記は終わり、それ以降の帰路の記述はない。文末では「暴風や雷雨は、その接近が予知できるが、地震はいつ起きるかわからないし、いつ終わるかもわからない。地震をよく知っている者ほどそれを怖がる。自然界のこのような異変に対して、とるべき態度は二通りある。ただ一途に恐れおののくか、あるいは大して気にせず無関心でいるかである。日本人は大抵、後者のほうで、彼らの精神的特徴をよく表している。日本人は何か事にぶつかると、よく「仕方がない」(どうすることもできない、の意)[there is nothing to be done; it can't be helped]というが、それは彼らが、このような経験を経て、その本当の意味がわかっているか

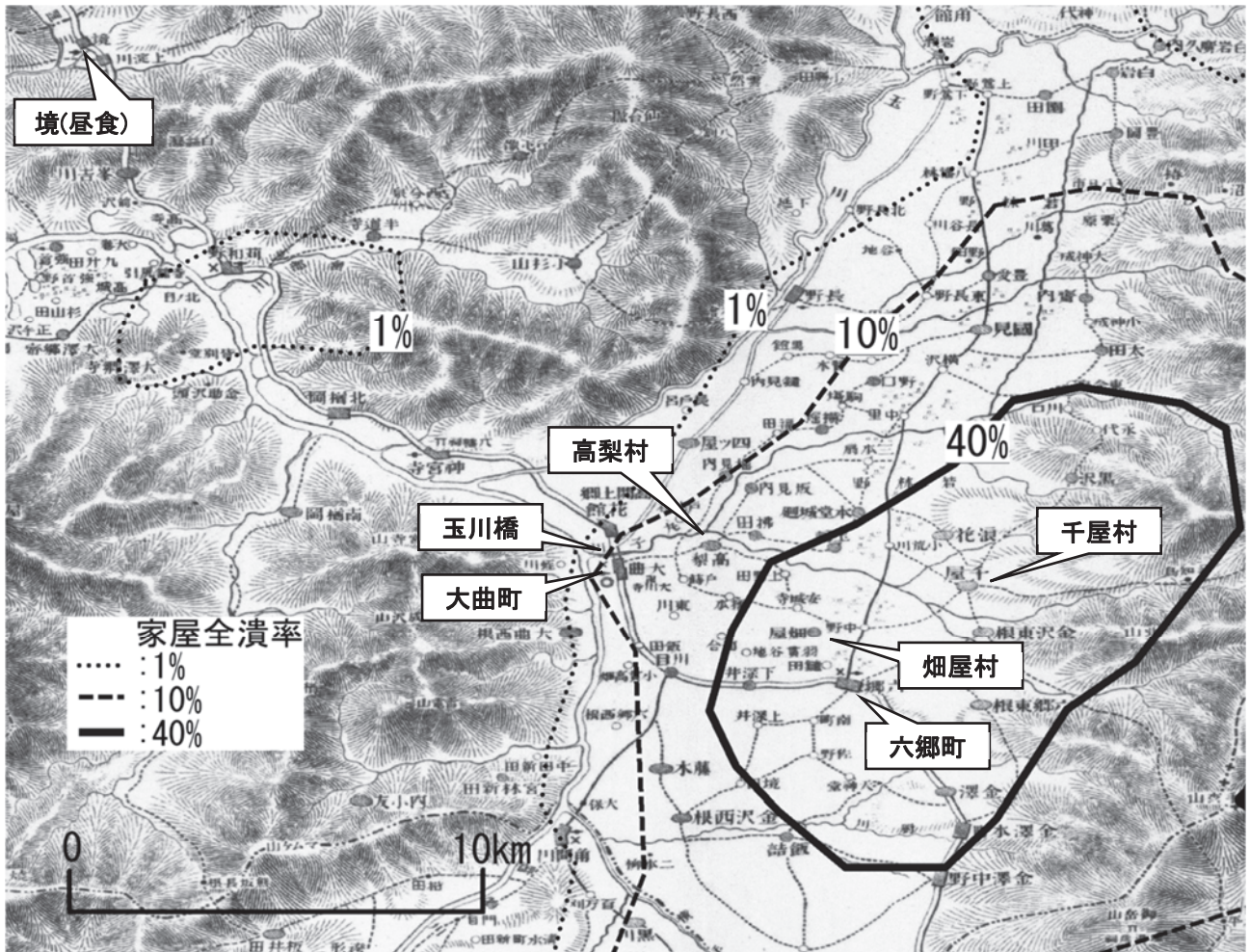


図 4 被災地域と訪問町村

Fig.4. Affected area and visited towns and villages.

表 3 掲載の写真とその出典一覧

Table 3. List of photographs in the book and their source literatures

	訳本	原本	写真の出典
1	応急の病院	Extemporized hospital in a school-house	秋田震災誌(1897) 図 20: 仙北郡六郷赤十字病院の図
2	陸羽地震	Completely destroyed	今村(1913) 図 16 上: 畑屋村住家全潰
3	地震でこわれた家	No title	不明
4	陸羽地震	After the earthquake	不明

らである」と結んでいる。図 4 に被災地域と訪問町村を示す。背景地図は 1890 年(明治 23 年)発行の 20 万分の 1 地勢図を用いた。

### 5.7 掲載写真について

本文中に 4 枚の写真が地震関連で掲載されている。表 3 に訳本および原本のキャプションと写真の出典を示す。写真 3, 4 は地震の報告書などでは見当たらないものである。著者の撮影によるものか不詳である。前述の序文に写真使用の謝辞に K.Suzuki 氏への謝辞があるが、人物を特定するには至っていない。

### § 6. むすび

本論では、東京大学地震研究所編集の『新収日本地震史料続補遺(1993)』に収録されている、外国人宣教師の H.B.Schwartz の残した 1896 年陸羽地震の地震見聞記に着目し、原本を参照し解説を試みた。

著者は弘前の教会に赴任中に陸羽地震に遭遇し、地震の 10 日後に弘前から秋田市を経て、被災地である秋田県大曲・六郷・畑屋・千屋・高梨を巡り被害の様相を克明に伝えている。

見聞記を読んで特筆すべき点を列挙すると、

1. 著者は日本における自然災害の多さに関心を持ち、1890 年から 1895 年の間に地震・火山噴火・津波

が続けて起きていることを挙げている。

2. 1896年8月の陸羽地震については、大地震であったが、起きた場所は東京から離れた山間部で人家が少なく、起きた時間が昼間で多くが屋外にいたため、被害は少なくすんだことを特徴として挙げている。
3. 地震後 10 日目に被災地へ出発している。同行者に関する記載はなく、通訳もつけない単独行と思われる。
4. 移動は人力車で秋田まで 3 日、秋田から被災地へは 1 日で移動し、大曲に 1 泊し翌日周辺の町村を訪問している。帰路の記載はない。
5. 秋田の宿では、宿の主人およびその息子から被災地の情報を得、人力車、大曲の宿の手配を受けている。
6. 被害の観察、記述は詳細かつ正確で被害報告書などと整合している。
7. 道中の景色をよく観察し米国との比較をするなど評している。棚田、藍の生産等当時の状況を良く表現している。
8. 食事に関する記述も詳細で、洋食を含む「もてなし」を堪能している。
9. 文末では、日本人の災害観として「仕方がない」(there is nothing to be done; it can't be helped)を挙げている。

外国人による地震見聞記は日本人の見聞記とは一味違う情報を有している。外国人の視点からの当時の時代背景を理解することができる。存在は稀であろうが今後とも類似の資料の発掘に努めていきたい。

### 謝辞

本稿の作成にあたって、匿名の査読者から、原本と訳本の対比を始め有益なご意見を多数頂き、本稿の内容を大幅に改善することができました。また、編集担当の白石睦弥氏から東奥義塾についてのご指摘を頂き、本稿の内容を改善することができました。ここに記して謝意を表します。

対象地震: 1896 年陸羽地震

### 文献

秋田震災救済会, 1897, 秋田震災誌, 169pp.

青森県, 2018, 第 5 節キリスト教思想と教育, 青森県史通史編 3, 71-88.

文化庁, 旧池田氏庭園, 文化遺産オンライン, <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/218349> (2022.11.1 閲覧).

藤原優太郎, 2006, 土木建築の近代化遺産No.52 玉川橋, 秋建時報, 1151, 3, <http://a-kenkyo.or.jp/shuken/0611/top.html> (2022.11.1 閲覧).

今村明恒, 1913, 明治二十九年の陸羽地震, 震災予防調査会報告, 77, 78-87.

鏡味洋史・水田敏彦, 2017, 『畑屋村震災惨状記』に記された 1896 年陸羽地震の震災の状況と対応について, 歴史地震, 33, 11-29.

三浦宗次郎, 1893, 吾妻山破裂調査概況, 地学雑誌, 5-54, 267-272.

水田敏彦・鏡味洋史, 2008, 1896.8.31 陸羽地震の岩手県における被害に関する文献調査, 日本建築学会技術報告集, 14-28, 665-668.

水田敏彦・鏡味洋史, 2009, 1896.8.31 陸羽地震の秋田県における被害分布に関する文献調査, 日本建築学会技術報告集, 15-30, 597-600.

日本基督教団弘前教会 HP, <http://hirosakichurch.sakura.ne.jp/index.html> (2022.11.10 閲覧).

大森房吉, 1893, 吾妻山噴火に関する委員の報告, 震災予防調査会報告, 1, 60-62.

Schwartz, Henry B, 1908, In Togo's Country, Jennings and Graham, 233pp.

島津久大・長岡祥三訳, 1984, 薩摩国滞在記 宣教師の見た明治の日本, 新人物往来社, 180pp.

東京大学地震研究所, 1993, 明治 29 年 8 月 31 日 [陸羽][薩摩国滞在記 - 宣教師の見た明治の日本], 新収日本地震史料続補遺, 1006-1010.

注:『新収日本地震史料続補遺(1993)』の正誤表

頁	誤記
1007 頁上段 8 行目	誤: 有難かった 正: 有り難かった(送り仮名の脱字)
1007 頁下段 9 行目	誤: 丘一面黄金色の 正: 丘一面に黄金色の(助詞の脱字)
1008 頁上段 23 行目	誤: 午前 1 時 正: 午前 11 時(脱字)
1009 頁上段 9 行目	誤: 辛うじて 正: 辛じて(送り仮名の衍字)

匿名の査読者の指摘に基づき作成